



城東図書館 2023年6月16日～7月19日実施

まちなひと 小倉 千裕さんの紹介本リスト

俳優 シンガー 舞台芸術研究者 銭湯愛好家

現代演劇のフィールドワーク 芸術生産の文化社会学	佐藤 郁哉/著	東京大学出版会
<p>私は大学院の経済学研究科で、日本の演劇における前売券と当日券のチケット価格の研究を行っていました。この本はその参考文献の一つであり、私にとって日本の演劇産業の本質を理解するバイブルのような存在です。劇団への聞き取り調査を交えて組織としての構造を明らかにした本書から、研究に直結する多くの学びを得ました。びっしりと貼られてあるメモ付きの色とりどりの付箋から、必死に読み解こうとしていた学生時代の自分の姿が目に見えます。また当時偶然にも、著者の佐藤郁哉先生は私がいた大学院に教授として着任されていたため、直接お話を伺い、研究へのコメントをいただくことができました。社会に出て、演劇に関わる仕事をするようになった今だからこそ、初心に戻って読み直してみたいです。</p>		
大いなる小屋 江戸歌舞伎の祝祭空間	服部 幸雄/著	講談社
<p>近世の芝居小屋のディテールに迫り、その随所に秘められた精神性を解き明かした本書。かつて、歌舞伎をはじめとした芸能が、どのように演ぜられ、嗜まれていたかが立体的に浮かび上がってくるようで、とても面白かったです。江戸時代の女性の間で、好きな歌舞伎役者の紋を髪飾りや装身具に付けるのが流行った、という記述を見て、現代における「推し」を応援する感覚に近いものを感じました。江戸時代に観劇料がどのように扱われていたかを調べる目的で購入しましたが、読み進めるうちに、現代では失われた芝居小屋の世界にすっかり魅了されてしまいました。歌舞伎や歴史がお好きな方、日本の昔ながらの文化に関心がある方におすすめです。</p>		
OSK日本歌劇団100周年誌 桜咲く国～OSKレビューの100年～	OSK日本歌劇団創立100周年誌編集委員/編集	OSK日本歌劇団
<p>大正11年に、松竹楽劇部として大阪で誕生したOSK日本歌劇団は、昨年2022年に創立100周年を迎えました。劇団員は女性のみで構成され、男役と娘役に分かれて華やかな歌とダンスを披露する「歌劇」という形式を取っており、特に「春のおどり」は、なにわの春の風物詩として親しまれてきました。</p> <p>私事ですが、昨年までOSK日本歌劇団で広報宣伝の仕事に携わり、今回ご紹介する100周年誌の執筆にも参加させていただきました。私が担当したのは、2020年以降の現代の章です。コロナ禍で舞台芸術産業は大きな打撃を受けましたが、OSKも7ヶ月の間、通常公演の中止を余儀なくされました。時代の荒波に翻弄されながらも試行錯誤を続けた劇団の歴史が、この本に詰まっています。</p> <p>戦前の貴重な舞台写真も多数掲載され、日本における歌劇の変遷を辿るという意味でも、とても中身の濃い一冊です。ぜひ一度お手に取ってみてください。</p>		
“役を生きる”演技レッスン リスペクト・フォー・アクティング	ウタ・ハーゲン/著	フィルムアート社
<p>舞台俳優として演技の勉強をする中で、感銘を受けたのがこの本です。俳優を志す人向けの演技の指南書ですが、とても謙虚な姿勢で親しみやすい文体で書かれており、ちょっと興味がある、という方にもおすすめです。著者のウタ・ハーゲンが、演技講師としてスタジオで実践していたトレーニング方法や、自身の舞台経験から得たノウハウなどが、書かれています。</p> <p>演ずるということは、リアリティの追求や、自分の記憶・感情・感覚とどう向き合うか、という点で、とてもセンシティブな要素を持っています。それだけに、この本の『今はもうだいじょうぶ』と言える感情だけを使いましょう』『本物が舞台のリアリティを壊すこともある』という言葉には、目から鱗が落ちる思いでした。これからも演技を学んでいくにあたって「演劇作品の意図に沿いつつ、自由奔放でいることは難しい。一つの『技能』なのです。」という言葉に、心に刻んでおきたいと思います。</p>		
ダニーと紺碧の海	ジョン・パトリック・シャンリイ/[著]	白水社
<p>アメリカの劇作家の戯曲を翻訳したもので、男女の二人芝居の形式をとっています。私は20歳頃から演劇活動を始めており、何か演じがいのある良い題材がないか探す中で出会ったのがこの戯曲です。舞台はニューヨークのブロンクス。大都会の片隅で生きる孤独な男女が、互いに傷付け合いながら、恐る恐る心を通わせあうさまを描いた、ひりひりするような会話劇。思わず目を背けたいような悲惨さと、息を呑むような純粋な美しさと、そのどちらもが同居しているような戯曲です。</p> <p>表題のダニーは男の名前で、女はロバータという名前で。この戯曲に出会ったとき私は25歳で、31歳のシングルマザーであるロバータが、まだまだ手の届かない大人の女性に見えました。月日は流れて、気付けば私もロバータと同世代に。生半可な気持ちではできない戯曲ですが、いつかロバータを演じてみたいと思っています。</p>		

新国立劇場上演資料集 森本薫の世界	戌井 市郎/監修	新国立劇場運営財団
<p>森本薫は大阪の中津で生まれた劇作家で、1930年代～40年代にかけて活動し、その34年の生涯の中で多くの優れた戯曲を生み出しました。「女の一生」というタイトルは聞いたことがある方も多いのではないのでしょうか。主人公の布引けいは、杉村春子の当たり役として知られ、近年では大竹しのぶが演じて話題となりました。</p> <p>私はこの森本薫の戯曲がとても好きで、過去に「薔薇」と「かどで」という作品を、企画・演出・出演を兼ねる形で上演しました。森本薫の戯曲の登場人物たちは、現代の私たちと同じように、自分と他者との関係にがんじがらめになりながら、不器用に、でも懸命に生きています。何気ない台詞の中に、屈折した心情を滲ませるリアリティは見事というほかありません。何十年、何百年前に生きていた人たちに、時代を越えて共感することができる。これも演劇というものの醍醐味であると思います。ぜひ一度森本薫の世界に触れてみていただきたいです。</p>		

大竹野正典劇集成 I	大竹野正典/著	松本工房
<p>大阪で活動した劇作家・演出家 大竹野正典さんの戯曲をまとめた全三巻の劇集成のうち、今回ご紹介する第一巻は、活動後期にあたる「くじら企画」での作品が収録されています。著者の戯曲は、実際に起こった事件をモチーフに、事件の再現ではない、演劇ならではの表現で生々しい人間ドラマを克明に描き出す作風が多く、この第一巻においてもその劇世界を存分に味わうことができます。</p> <p>初めて著者の作品を観劇したとき、まず、実際の事件の加害者・被害者をモチーフにした役を演じる俳優がいる、ということに、大きな衝撃を受けました。そして、その役に迫っていく道のりの陰しさ、苦しさについて、思いを巡らせました。生々しい感情の渦とフツと引いた俯瞰の視点が合わさり、凄惨な現実にと釣り合いとも思えるような美しさが漂う世界。もっとこれらの戯曲を劇場で観てみたいと思いますし、いつか俳優として向き合ってみてみたいです。</p>		

愛の余韻 榎本てる子命の仕事	榎本 てる子/著 青木 理恵子/編	いのちのこぼ社
<p>キリスト教の牧師であった榎本てる子さんが2018年に亡くなられた後、てる子さんのカナダ留学時の日記を収録し、関わりがあった方々の寄稿とともに出版されたのがこの本です。てる子さんの活動の一つとして、京都のバザールカフェというコミュニティカフェの運営があり、私もバザールカフェを通して親交を持っていました。カナダで好奇心旺盛に学びを吸収し自問自答する、若き日のてる子さんの姿から、私もまた沢山の学びを得ています。茶目っ気のある文章で、まるで同級生の日記を読んでいるような気持ちになります。彼女が書いた「思い出がよみがえること、そして思い出が今生きている私たちの心の中で生き続けるようになることが、大切なことだと私は思う。」という言葉が、今、てる子さんのいない世界を生きる私たちの思いとして、あたたかく響いてくるように思います。</p>		

生きがいについて	神谷 美恵子/著	みすず書房
<p>大学院生時代に就職活動をしていて、思い悩み鬱屈とした気持ちの中で、たまたま本屋で手に取ったのがこの本でした。</p> <p>ハンセン病患者の療養所長島愛生園で精神科医として勤務していた著者が、日々患者と接する中で人間の「生きがい」について思考する様子が書かれています。</p> <p>読んでみて、50年以上前に書かれたにも関わらず全く古さを感じない文章に驚き、人間が生きていくことの根幹を問う普遍性に満ちた論考に、深い感動を覚えました。世代を越えて長く読み継がれている理由が分かる気がします。手元の本はいつしか付箋だらけになり、今もたまたま付箋のページを開いては、言葉に心動かされ、瑞々しい気力をもらっています。人生の節目節目で読み直したい本です。</p>		

京都極楽銭湯読本	林 宏樹/著	淡交社
<p>城東区は今なお昔ながらの銭湯が残っている地域ですが、私自身幼少期から祖母に連れられてよく入りに行っていました。日常の中に当たり前にあるけれども不思議とワクワクする場所。それが私にとっての銭湯でした。番台でよくアイスやバヤリースを買ってもらったことを覚えています。</p> <p>そんな原体験から、大人になった今も銭湯が大好きで、好きが高じて大学時代は銭湯をテーマに卒業論文を書きました。当時、参考文献の一つとして購入したのがこの本です。暖簾、ペンキ絵とタイル絵、鏡広告、電気風呂など、銭湯にまつわるアイテムや特徴的な様式について、分かりやすく書かれています。銭湯の新たな魅力を知れる一冊。読むときっと、ふらっとまちの銭湯に出かけて行きたくなるはずです。</p>		

大阪市立城東図書館

大阪市城東区中央3-5-45 06-6933-0350

<https://www.oml.city.osaka.lg.jp/>